

ぼち 大阪湾再生ニュース ぼち いこか

大阪湾再生 Osaka Bay Regeneration
<http://www.kkr.ml.it.go.jp/plan/suishin/boti2/>
発行: 大阪湾再生推進会議

vol.3

人と海の関わりの再生をめざして…
楽しみながら取り組む大阪湾再生の現場を伝える
2007.3
vol.3

自然がいっぱい残る
我らの成ヶ島を
ゴミから救いたい

花野晃一さん

成ヶ島でゴミ12トン
「成ヶ島クリーン作戦」

由良中学生ら

行政事業紹介

「海上浮遊ごみの回収・海面清掃船について」

Copyright © 2006-2007 大阪湾再生ニュース【ぼちぼちいこか】 All rights reserved.

●行政事業紹介

海上浮遊ごみの回収・ 海面清掃船について



新造の海洋環境整備船「Dr. 海洋」

成ヶ島など、大阪湾にわずかに残された貴重な砂浜に漂着するごみ。国土交通省では、ごみが海岸に漂着する前の海上を漂っているごみ（浮遊ごみ）の回収を行っています。

ごみ回収に活躍しているのが「海面清掃船」とよばれる働く船です。平成18年の4月から12月までで大阪湾・紀伊水道で合計2,416㎡（25メートルプールで6杯分）ものごみを回収しました。

しかし、本当に肝心なのは、ごみ自体を川・海に捨てないこと。私たちの心のすき間からこぼれ落ちたごみが、大阪湾を巡り、貴重な砂浜を汚し、ウミガメなど貴重な動植物や地元の人々を苦しめているのです。

大阪湾再生推進会議では、市民・企業・行政との連携により、ごみ発生防止を目的としたPR活動をはじめ、様々な活動を行って参ります。

事業担当者：近畿地方整備局

SPECIAL INTERVIEW

自然がいっぱい残る 我らの成ヶ島を ゴミから救いたい

成ヶ島を美しくする会 会長 花野晃一さん

淡路島東岸・洲本市由良沖に浮かぶ成ヶ島は、自然が豊富に残る無人島だ。海は青く、島は美しい…と言いたいところだが、じつは大阪湾に流れるたくさんのゴミが漂着する“ゴミの島”でもある。せっかくの島を、なんとかして美しくしたいと、15年前から手弁当で活動をしている「成ヶ島を美しくする会」の代表・花野晃一さんに、島への思いと活動について聞いた。（続きは裏面へ）



成ヶ島でゴミ12トン 「成ヶ島クリーン作戦」

由良中学生ら

成ヶ島では、1998年から毎年「成ヶ島クリーン作戦～みんなの力で由良の自然を守ろう」という活動が行われている。「成ヶ島を美しくする会」のメンバーや市民と共にこの活動に取り組んでいるのが、成ヶ島のお膝元・洲本市立由良中学校の生徒たち。生徒会会長の2年・山本裕貴くんら5人に感想を聞き、この活動を振り返ってもらった。（続きは裏面へ）



●花野晃一さん(つづき)

荒れた島を「なんとかしたい」

かつてこの島は「宝の島」と呼ばれていました。海水浴や潮干狩りのメッカで、京阪神などから来る人たちでも賑わいました。でも、レジャーの多様化の波を受け、宿舎や定期渡航船が廃止されたのが1986年。以後、松は枯れ、ゴミは打ち上げられ、荒れ放題でした。そんな島の姿を見るにつけ、「なんとかして美しくしたい」と思っていた仲間が、立ち上がったわけです。



成ヶ島展望台から。「ミニ天橋立」のような風景がひろがる

松の植林、成ヶ島まつり…

最初、島一面に生えていた松が松食い虫にやられていたので、どうにかしたいと。6年に渡って3000本の黒松を植えたんですが、残念ながら10年ちょっとで、また松食い虫にやられて全滅しました。

次は、由良の地元民の多くに、成ヶ島に関心を向けてもらおうことが大事だと、「成ヶ島まつり」というのを開きました。海岸を歩いてゴミを拾ってきて、変わったゴミを出してくださいと「漂着ゴミコンテスト」もしましたね。以来、毎月第2日曜日に定例の掃除をしています。

成ヶ島まつりは毎年400人ほどが参加し、盛況だったんですが、準備に手間がかかりすぎるので、3年ほどで「ハマボウ見学会」に変更しました。

これは不定期に今も続けており、由良以外からも色

※成ヶ島を美しくする会 TEL 0799-27-0393 HP http://www1.sumoto.gr.jp/ymnk4a/index_001.htm

●由良中学生ら(つづき)

今年で10回目



成ヶ島展望台から。「ミニ天橋立」のような風景がひろがる

今年の「成ヶ島クリーン作戦」は、由良中学校の生徒会が呼びかけ、全校約90人が参加した。1998年2月に初めて行われてから、今年で10回目。学校では「総合的な学習の時間」にあてている。

「最初に、展望台の周辺でナルトサワギクを引き抜きました」と、森下暢己くん。ナルトサワギクとは、約30年前から国内に広まり、近年島にも破竹の勢いで繁殖するマダガスカル原産の多年草。一見すると美しいが、これが曲者で、既存の植物を駆逐する。ナルトサワギクが繁殖することによって、これら島の自然の植生への影響が心配される。引き抜いて防御するのがベストな方法なのである。

「意外とすんなり抜けました。でも、たくさん生えていたので困った」全員が引き抜いた合計は、約100キロにのぼった。

※写真提供:由良中学校(ナルトサワギクの写真は除く) HP <http://www1.sumoto.gr.jp/yura-t/>

んな人たちが来られた。後に地元情報と研究の成果を共有することになる大阪府立大学の細田龍介先生(名誉教授＝海域環境学)との出会いもありました。

専門家からの注目

ええ。多くの研究者もやって来られて。

成ヶ島にはハマボウだけでなく、潮が満ちると海水の没するのに枯れない「ハマツツナ」の群生もあり、晩秋に真っ赤に紅葉しますし、ハマボウ群落の近くに自生するハマヨモギの根に寄生しながら生きる「ハマウツボ」も6月頃に淡紫色の花をたくさんつけます。ウミガメの産卵はやわらかい砂の上で行われます。手つかずの自然が残っているからこそなんです。

大阪湾にわずかしが残っていないアマモも群生している。だから、島を荒れさせてはダメ。漂流ゴミをなんとかしないといけないこととつながっているんですね。

大がかりなゴミ拾い ——クリーン作戦

1999年、中学校と連携し、クリーン作戦がスタートしました。今年で13年目になります。

その後、海の日に午前中ハマボウの観察会と海岸清掃、午後は由良中学校の体育館で「みんなで見て考えよう成ヶ島を」のテーマに自然環境シンポジウムを開催しています。



成ヶ島に、異常なほど漂着ゴミが多いのはなぜ？

私たちは最初、由良の地元住民のマナーが悪いからだと思っていたんですが、違っていました。細田先生の研究によると、大阪湾に浮くゴミが、埋め立て護岸や港の垂直護岸には漂着せずに移動し、時計回りの潮流に乗って、自然海岸や自然の渚が残る成ヶ島にやってくるということなんです。半端じゃないです(笑)。

どんな種類のゴミが多いのですか

最も多いのは発泡スチロール、ペットボトル、ビニール袋ですね。最近とみに増えているのはペットボトルに詰めた注射器。覚せい剤を使用したもののようです。

注射器から「変な物体」まで さまざまなゴミ

続いて、浜に移動し、海岸に打ち上げられたペットボトルやプラスチック製品、ビニール袋などのごみを拾い集めた。

「ゴルフボールが多く、ジッポのライターもあった。ほかに、オレンジ色で重たい長方形の変な物体も、大きなタイヤも漂着していたので拾った」

……山本裕貴くん

「ハングル文字が書かれたペットボトルもあった。注射針もあった」……森下暢己くん

「多かったものベスト3は、スーパーのビニール袋、発布スチロール、空き缶だったと思う」……唐渡久恵さん

……藤本壮くん、神瀬友梨香さん

生徒一人1時間余りずつの清掃は、午前中に終わった。結果、回収したゴミは、2トンパッカー車2台と2トンダンプカー4台分となり、ゴミ焼却場へと運ばれた。

「なんで自分たちが？」から 「いつか自然の山に」へ

地元由良に生まれ育った生徒たちだが、前世代の人のように、子どもの頃に成ヶ島で頻繁に遊んだ経験はない。5人のうち、藤本くんだけが「父と一緒に、泳いで成ヶ島に渡ったことが一度だけある」と言う。生徒たちが育った時代の成ヶ島の浜は「泳泳禁止」で、すでに荒廃した後だったわけだ。そのため、大人たちのような愛着は希薄だ。だが、毎日当たり前に視界に入り、なくてはならない風景の要素だったことは確か。



内陸部から「長い旅」の末に成ヶ島に漂着したゴルフボール

ライターや空き缶、タイヤからクーラー、テレビ、冷蔵庫、洗濯機など家電製品まで、「これだけあれば暮らせる」と思えるほど、ありとあらゆる種類が流れ着きます。

海洋投棄されたゴミだけでない？

成ヶ島に漂着するゴミは、山や谷、小川、農業用水路に捨てられたものも含まれています。それが川の本流を通って大阪湾に流れ込み、流れ流れて成ヶ島に届いているのだという事実。何気なく捨てたもの、落としたものでも、大都市部を抱えた自然海岸に積み積みもれば莫大なのだということを、広くみなさんに知ってもらいたいと思います。

一連の活動から見てきたことは？

成ヶ島の魅力をさまざまな角度から再発見でき、今よりも悪くならない努力をするが一番でしょうか。掃除に関しては、どんなに掃除しても、大量の漂着ゴミといちごっこですが、継続は力。一連の活動が、地元民にも地元外の人にも理解を深めてもらうことにつながったと思う。行政にも伝わり、水洗の公衆トイレの設置や渡し船の復活を見ました。

外と地元、両方のネットワークで

この19年間に、活動をしなかったら知り合うことのなかった人たちとずいぶん知り合いました。「外の風」は刺激的だし、地元の仲間も広がりました。今後も、「外」と「地元」両方のネットワークをさらに広げ、楽しみながら活動が続けたいと思っています。

「1年の時、初めてのクリーン作戦をする前は、なんで自分たちがこんなにしんどいことをわざわざしないといけないのかと思った」というのが、正直な印象だろう。だが、「1回すると考えが大きく変わった」と皆、口をそろえる。

「ゴミ拾いはしんどいが、意義があると思えた。町や自然のためになる行事だし、自分たちのためでもある行事だ。頑張れば、いつかゴミの山が自然の山に変わっていくかもしれない。由良にその日が来ることを願って、一つひとつゴミを拾ったし、また拾いたいと思う」口々に、そんな感想をくれた。



ゴミから環境問題が見えてくる

由良中学校校長の岡洋司さんは、「ゴミ拾いという行為を端緒に、広く環境問題に興味を示す生徒も少なくありません。自分たちがゴミを捨てないのは当たり前。ゴミの行き先、リサイクルについて考え、一つひとつのことが地球温暖化につながっているんだと認識したと話す生徒も出てきて、確かな手応えを感じています」と話している。